

次の文章は、島崎藤村の小説『夜明け前』の一節である。木曾馬籠の庄屋青山半蔵は、明治新政府に対する強い関心を抱いていた。しかし、木曾の山中では新しい世の中の変化は容易に知ることができない。そこで半蔵は、その変化を確かめようと旅に出たが、留守中に農民一揆が起こり、急いで帰郷することになる。本文は、それにつづく部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

「お霜婆。」

「あい。」

「お前のとこの兼さに本陣の旦那が用があるげなで。」

「あい。」

「そう言ってお前も言伝ことづけておくれや。ついでに、桑さにも一緒に来るようにツて。頼むぞい。」

「あい。あい。」

馬籠本陣の勝手口ではこんな言葉がかわされた。耳の遠いお霜婆さんは、下女から言われたことを引き受けて、もう何十年となく出入りする勝手口のところを出て行った。

越後路の方へ行った七人の農兵も宰領付き添いで帰って来た朝だ。六十日の歩役を勤めた後、今度御用済みということ、残らず帰村を許された若者らは半蔵のところへも挨拶あはれに来た。ちようどそこへ、兼吉、桑作の二人も顔を見せたので、入り口の土間は一時ごたごたした。

半蔵も西から帰ったばかりだ。しかし彼は旅の疲れを休めているとまもなかった。日ごろ出入りの二人の百姓を呼んで村方(A)の様子を聞くまでは安心しなかった。

「兼吉も、桑作も、囲炉裏ばたの方へ上がってくれ。」

と半蔵がいつもと同じ調子で言った。

そこは火の気のない囲炉裏ばただ。平素なら兼吉、桑作共に土足で来て踏ふン込こむところであるが、その朝は手ぬぐいで足をはたいて、二人とも半蔵の前にかしこまった。もとより旧ふるい主従のような関係の間柄である。半蔵も物を聞いてみるのに遠慮はいらない。留守中の村に不幸なものを出したのは彼の不行き届きからであって、その点は深く恥じ深く悲しむということから始めて、せめておおよその人数だけでも知って置きたい、言えるものなら言ってみてもらいたい、そのことを彼は二人の前に切り出した。

「旦那、それはおれの口から言えん。」と兼吉が百姓らしい大きな手を額に当てた。「桑さも、おれも、この事件には同類じゃないが、もう火の消えたあのようなもので、これについては一切口外しないようにって、村中の百姓一同でその申し合わせをしましたわい。」

「いや、そういうことなら、それでいい。おれも村から人が出したくない。」と半蔵が言った。「おれが心配するのは、これから先のことだ。こういう新しい時世に向かって来たら、お前たちだっとうれしかろうに。あのお武家さまがこの街道へ来てむやみといばった時分のことを考えてごらん、百姓は末の考えもないものだなんて言われてさ、まるで腮あひで使う器械のように思われたことも考えてごらん。お前たちは、刀に手をかけたお武家さまから、毎日追い回されてばかりいたじゃないか。御一新ということになって来た。ようやくこんなところへこぎつけた。それを考えたら、お前たちだっとうれしかろう。」

「そりゃ、うれしいどころじゃない。」

「そうか。お前たちもよろこんでいてくれるのか。」

問 傍線部④「村方の様子を聞くまでは安心しなかった。」とあるが、半蔵はなぜ「村方の様子」を聞き取ったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 各地を転戦して帰村した農兵たちを、兼吉、桑作ら村人になじませるために、村の状況を詳しく聞きたかった。

② 村の責任者として、留守の間に起こった事件について、その実情をできるだけ詳しく聞きたかった。

③ 旧くから主従の関係にあったので、兼吉と桑作の不行き届きについて、その内容を詳しく聞きたかった。

④ 六十日の歩役を勤めた七人の若い農兵たちを、どう迎えるか、村の人たちの意見を詳しく聞きたかった。

⑤ 歩役を勤めて帰ってきた若者たちの引き起こした事件であったので、その経過について詳しく聞きたかった。